

Vision

節目としての2010年に寄せて —日本生理学会をトップサイエンスリサーチャー/ トップエデュケーター育成の場に！—

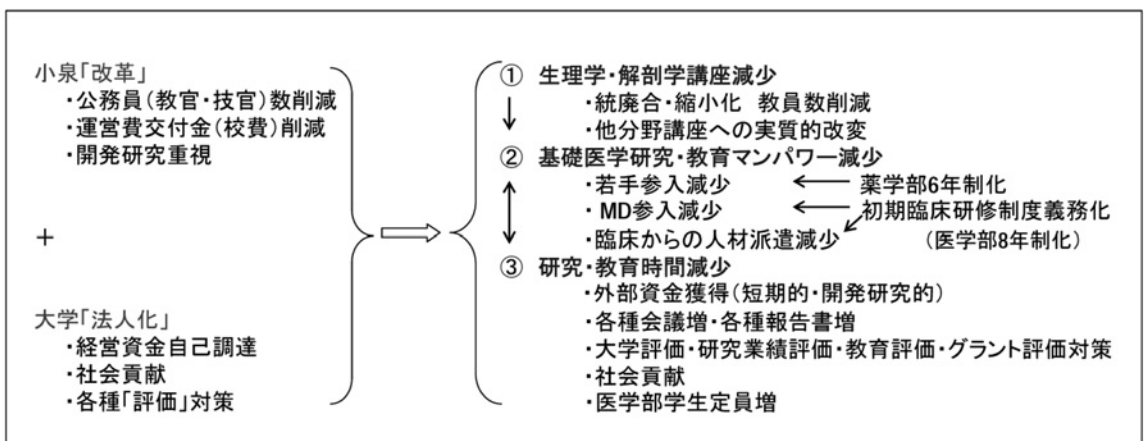
会長
岡田 泰伸

日本生理学会員の皆様、明けましておめでとうございます。IUPS2009を成功裡に終了し、本年を新たな気持ちでお迎えのことと存じます。

これまで数年間、日本生理学会はIUPS2009開催を射程に、その活動の軸をトップサイエンスリサーチの遂行と国際化（英語化）の実現においてまいりました。その努力は、IUPS2009の成功に結実し、国民による「生理学」の重要性に対する認知度の向上という成果も生むことができました。しかし一方でここ数年間、生理学や基礎医学の研究・教育環境には、「基礎医学教育・研究アン

ケート」結果 (<http://physiology.jp> 又は「日生誌」71巻3号参照)にみられるように、著しい劣化が進行し、学会活動の基盤である現場環境が足下から急速に崩れはじめています。

この基礎医学研究・教育の危機は、下図に示すように①生理学・解剖学講座の（実際の又は実質的）減少、②基礎医学研究・教育に携わるマンパワー（とりわけ若手とMD）の減少、③基礎研究・教育スタッフの雑用増と研究・教育時間の減少として表れています。このような惨憺たる状況は、生理学や生理学会にとどまらず、長期的にはわが



国の国力そのものをも衰退させていくものと言わざるを得ません。2010年は関連他学会とも連帯しながら、この問題を解決していく出発の年としなければなりません。

このような多くの困難を抱えつつも、私達学会員は研究も教育も疎かにしない覚悟と工夫をする年としなければなりません。トップサイエンスリサーチの遂行のためには、一定期間は（たとえば1—3ヶ月でも、あるいは週3—4日ずつでも）雑用を離れ、集中して研究に打ち込めるようにすべきではないでしょうか。そのようなことを可能とする「サバティカル」的な制度は、最近多くの大学に設けられ始めているようです。しかし、その実際の活用には多くの難しい点があるようですので、その障害（偏見も含めて）を取り除く努力も必要でしょう。いくら努力してもそのような時間的区切りが同じ場にいるかぎり難しい場合には、空間的に離れて他国や他機関に研究の場を求めることが有効でしょう。大学共同利用機関は、その

ための有利な受け皿を用意していくべきではないでしょうか。

充実した生理学教育は、未来の生理学者の発掘・育成のみならず、科学的に考えて判断できる臨床医やコ・メディカルスタッフの育成にも極めて重要です。日本生理学会大会は、トップサイエンスリサーチの演題発表・情報交換の場を与えるのみならず、教育関係の演題発表・情報交換の場としての機能も果たしていく必要があるのではないのでしょうか。多くのMD出身者の参入が望めない状況においては、この取り組みは更に重要なものとなるでしょう。大会期間の1日は、教育に限ったセッションや催しに集中することや、その出席者に「上級生理学教育者」認定証を発行するなどの新しい取り組みも有効かもしれません。皆さんからのご意見とご提案を期待します。

「日本生理学会をトップサイエンスリサーチャー/トップエデュケーター育成の場に！」